

# 特別史跡 讀岐国分寺跡

昭和58年度発掘調査概報



国分寺町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は香川県綾歌郡国分寺町国分字上所に所在する国特別史跡讃岐国分寺跡の昭和58年度発掘調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業として国分寺町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は文化庁、奈良国立文化財研究所ならびに香川県教育委員会文化行政課の指導を受け国分寺町教育委員会が行なつた。

## 目　　次

1. 「讃岐国分寺」の位置ならびにその歴史.....	1
2. 国分寺境内などに残る遺構について.....	5
3. 発掘調査にいたる経緯.....	8
4. 土層.....	9
5. 遺構について.....	11
6. 遺物について.....	15
7. まとめ.....	23
8. 図版.....	24

## 1.「讃岐国分寺」の位置ならびにその歴史

特別史跡讃岐国分寺跡は香川県綾歌郡国分寺町国分字上所にあり、旧石器時代の遺跡である国分台（407m）のゆるやかな南側のすそ野に開けたところに位置している。

そこから西約2kmに讃岐の国司庁跡があり、東約2kmには讃岐国分尼寺跡がある。調査は香川県において昭和52年度から数年に亘って行なわれ、倉庫跡、井戸跡、築地跡などが検出されているが、その規模、中心的建物などはまだ明らかにされていない。また、讃岐国分尼跡の昭和57年度の発掘調査で寺域の西を画するとと思われる溝状造構の検出が行なわれた。これは、過去尼寺は一町四方の大きさといわれていたことを覆すものである。これによって尼寺の寺域は一町半四方の大きさであると考えられるようになった。ただし、昭和3年に指定された史跡讃岐国分尼寺跡の範囲は東西は南辺で202.5m、北辺で181.5mであり、南北は東辺で191.25m、西辺で168.75mの約一町半の地域である。



(讃岐国分尼寺跡)

さらに、「国分寺」と南の鷲ノ山までの約700~800mの間に古代の官道である南海道も通っていた。また国分寺の南西約1kmのところには讃岐国分寺等の瓦を焼いたと考えられる窯跡（史跡府中・山内瓦窯跡）も残されている。

このように讃岐国分寺の周辺は、古代から政治、経済、文化、宗教の中心地域として栄えてきたところであると考えられる。

しかし、この国分寺のある国分寺町も古代の官寺である国分寺の創建以前の遺跡については現在のところあまり多くは見いだされていない。すでに述べたが、国分寺の後方の国分台はそこに産するサスカイト（カンカン石）を用いた一大石器工場と考えられる旧石器時代の遺跡である。これらの石器類は町内では国分寺の西の蓮光寺山、東の橋岡山、さらには南東約3kmはなれた兎子山でも採集されている。



(府中・山内瓦窯跡)

縄文時代の遺跡は町内ではまったく発見されていない。

弥生時代については、国分寺の北西の蓮光寺山の檍原（70~80m）で中期の壺、甕類が計8点掘りだされているが、遺跡等の検出は行なわれてい

ない。

古墳時代になると町内にもいくつかの古墳が知られていた。さらに58年度の埋蔵文化財の分布調査でも新たに数基の古墳が確認された。しかし、最大のものでも径8.5m高さ約4mで横穴式石室をもつ石ヶ鼻古墳であり、周辺の地域と比べてむしろ貧弱な感じを受ける。ただ播磨国風土記南条に出てくる「羽若石」ではないかと考えられる鷲ノ山産の石を使った石棺が県下に町内の1例を含めて8例、大阪柏原市の松岳山古墳、安福寺にある各1例の計10例が確認されている。（なお石棺については11例との説もある）そしてこれらの石材加工に従事した多くの人々が存在したものと考えられるが、関連の遺跡遺構は明らかになっていない。以上が国分寺創建までの町内の概要である。



(石ヶ鼻古墳)



(石舟石棺)

讃岐国分寺の歴史は天平13年（741年）国分寺造営の詔勅が聖武天皇により発せられたことにはじまる。讃岐国分寺の創建年代は特定されていないが、天平勝實8年（756年）12月に「越後丹波、丹後…讃岐…日向等廿六國々別領下灌頂幡一具、道場幡哥九首。絆綱二條以苑周忌御齋莊鎔。用了収置金光明寺。永為寺物。隨事出用之」（續日本紀）とあり、このころまでには建立されていたものと思われる。

ただし、現在の国分寺境内から明らかに創建時代の瓦に先行すると推定される瓦が戦前に出土しており、讃岐国分寺創建以前に「前寺」が存在しており、この前寺を整備拡張する形で讃岐国分寺（金光明四天王護国之寺）が建立された可能性も考えられる。このことについては今後の発掘調査で明らかになるものと思われる。

讃岐国分寺の寺域は、当時の上国が多くがそうであったように二町四方の寺域を有していたものと考えられている。なお現在特別史跡讃岐国分寺跡の指定寺域は東西227m、南北233mの範囲である。

その御藍は寺域の中央に造営されるのが普通であるが、讃岐国分寺は、南門、金堂、講堂の主要御藍が寺域の西半分（寺域の西端から $\frac{1}{4}$ の南北線上）に配置された西中央方式の「国分寺式」御藍配置であったと考えられている。このことは現在金堂跡の礎石の様子などからうかがい知れる。この讃岐国分寺は甲斐、下野、周防の国分寺と相似しているものといわれている。

さて、官寺として建立された讃岐国分寺がいつの時点で堂塔御藍が整備し終えたかは記録には残っていない。さらにその讃岐国分寺も全国の国分寺の例が示すように平安末期には相当度

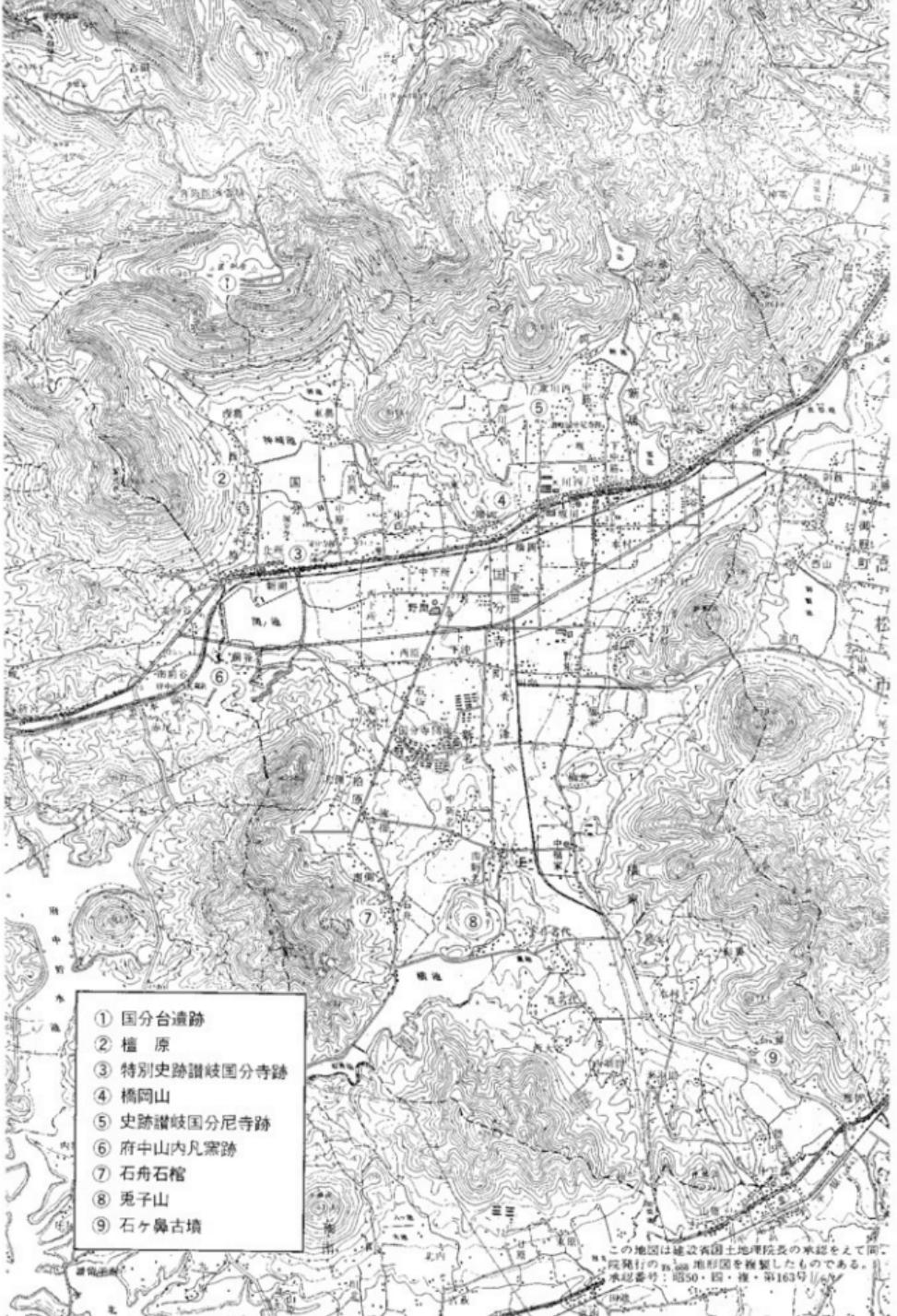
頬していたものと推測されるが、これも又、文献記録がなく詳しい事情はわからっていない。ただ以下にしるすことなどが現在明らかにされている。

現本堂が鎌倉時代中頃の遺物であると考えられていること。本堂の脇役の野地板に使用されていた板壁の板に永正、天文時の墨書きが発見されていること。又本尊の千手観音立像の腹や腰のあたりに大永年間の落書きがあること。長曾我部氏が四国平定の折に讃岐国分寺に陣をしいたことが南海治乱記などに見られること。生駒氏、松平氏の文書が残っていることなどである。

のことから讃岐国分寺は創建以来幾度かの盛衰をくりかえして現在にいたっているものと考えられる。これらの変遷のいくつかも今後の発掘調査でしだいに明らかになるものと思われる。



(讃岐国分寺跡遠景)



- ① 国分台遺跡
- ② 権原
- ③ 特別史跡諸岐國分寺跡
- ④ 橋岡山
- ⑤ 史跡諸岐國分尼寺跡
- ⑥ 府中山内凡窯跡
- ⑦ 石舟石棺
- ⑧ 禿子山
- ⑨ 石ヶ鼻古墳

この地図は建設省土地理政局の承認をえて同  
院発行の1:50,000地形図を複製したものである。  
承認番号：昭50・四・復・第163号

## 2. 國分寺境内などに残る遺構について

讃岐國分寺の主要な伽藍等について『國分寺町史』、『文化財のしおり』、『國分寺町の文化財』（以上國分寺町教育委員会発行）『香川県の文化財』、『新編香川叢書考古篇』（以上香川県教育委員会発行）など現在までに明らかにされているものからその概況をみてみると次のようである。

### (1) 金堂跡

讃岐國分寺の中心建物である金堂の跡と考えられているところには、現在一部移動しているものもあるが32個の自然石をもちいた礎石が残っている。

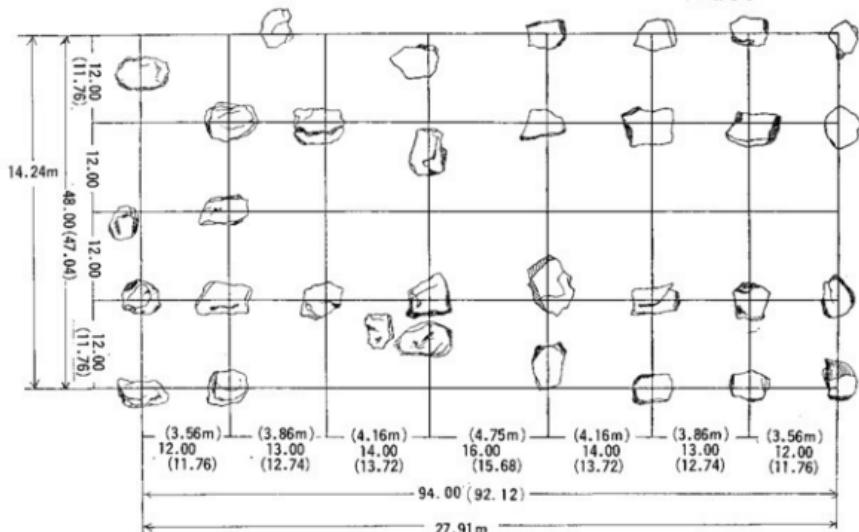
この礎石から建物は東西7間（約28m）南北4間（約14m）の大きさで奈良唐招提寺の金堂とその規模や建築様式が近いものと考えられている。しかし基壇の状況などについては調査が行なわれていない。



（金堂跡礎石）

（金堂跡礎石実測図）

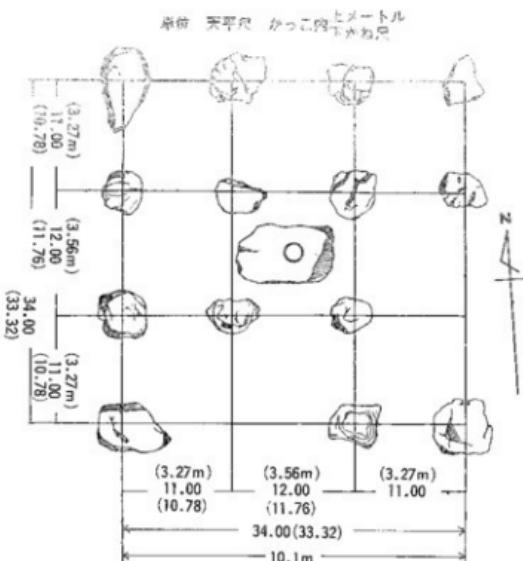
単位 天平尺 かっこ内上メートル  
下かねざし



『香川県の文化財』、『文化財のしおり』、より

### (3) 塔跡

金堂の心心から南へ55mさらにそこから東へ30mの所に塔の心礎があり、この心礎を含めて自然石の礎石15個がほとんど原位置に残されている。心礎は東西2.8m、南北1.8mの大きさでその中央に40.5cmの納穴がある。これらの礎石から塔の大きさは東西10.1m、南北10.1mであり、3間3面の七重の塔が建立されていたものと考えられている。現在心礎の上に鎌倉時代と推測されている高さ3.15mの五重の石塔（七重の石塔と呼ぶ人もいる）が建っている。



(塔跡礎石実測図) 香川県の文化財、文化財のしおり、より

### (3) 講堂跡

現在白牛山国分寺の本堂が建っているところが、元の講堂跡ではないかと推定されている。昭和16年から18年にかけて行なわれた本堂の解体修理の時に床下の基壇部から奈良時代の瓦片が検出されたこと、本堂の礎石が金堂跡、塔跡の礎石と同じものであることなどから、現在の本堂は元の講堂のあったところにその規模を縮小して建てられたのではないかと考えられている。

なお、つけ加えれば現在の本堂は東西17m、南北15.57mの五間五面の一重入母屋造り本瓦葺建物で、虹梁、斗拱、蟇股、間斗束などの形式手法から鎌倉時代中期に建立されたものと考えられている。（明治37年8月29日特別保護建造物、昭和25年8月29日重要文化財に指定）。さらにこの本堂には樅の一本造りで高さ5.24mの丈六の千手観音立像が本尊としてまつられている。この千手観音立像は平安時代末期の作ではないかと考えられている。（明治34年3月27日国宝、昭和25年8月29日重要文化財に指定）。



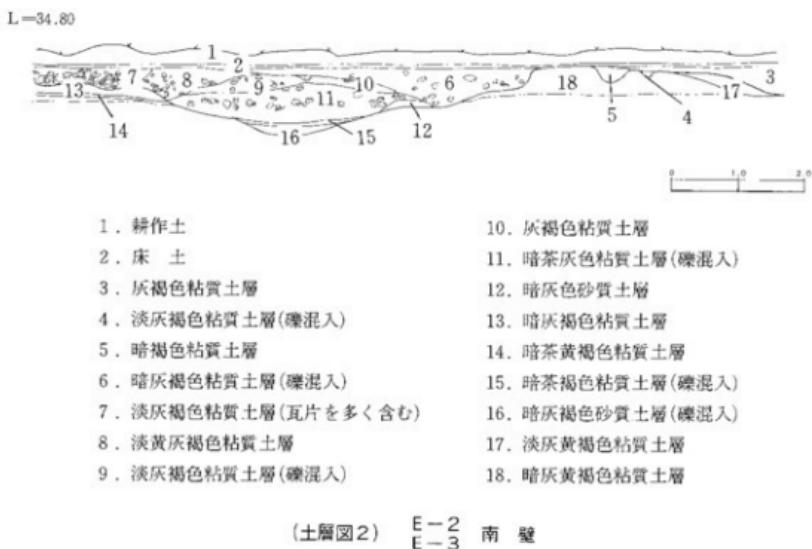
(白牛山国分寺本堂)

(4) その他の

特別史跡漫妙園分寺跡の指定地域の東側ならびに北には幅2~5m前後の土壙跡（築堤跡）と考えられる施設が残されている。

門については現在の仁王門が南門ないしは中門の跡ではないかとの説もあるが確認はされていない。

また、僧房跡の礎石ではないかと考えられる石が本堂裏の水田の中に数個確認されている。回廊、鐘楼、その他雜舎などの跡については現在のところ明らかにされていない。



## 5. 遺構について

### (1) はじめに

58年度調査で明らかになった注目すべき遺構は、創造当時のものと推定される讃岐国分寺の東の築地とそれにそった溝（堀）ならびに北の築地の肩と思われる土層の高まりの検出である。

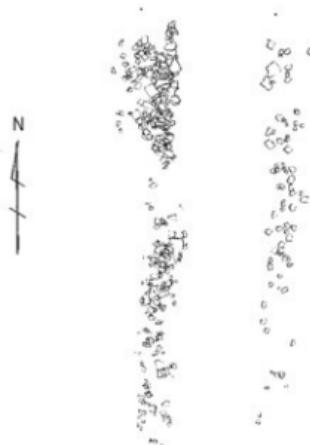
### (2) 東築地跡

特別史跡讃岐国分寺跡の指定寺域は東西227m、南北233mの方二町の広さであり、その東西ならびに北に幅約2～5mの畠地が一段高くなつて寺域をめぐっていた。今年度の調査が行なわれるまでは、その畠地が讃岐国分寺の境界を画する築地跡または土壘跡ではないかと考えられていた。

しかし、調査を開始してまもなく、南北に設定したトレーンチ（3m×10m）の耕作土下約50～60cmのところの西側に幅数十センチで30mにも及ぶ瓦列が検出された。このためこの瓦列のひろがり、ならびにその性格の確認を中心に作業を進めたところ、調査区の拡張によってトレーンチ西側でみられたのと同じ瓦列が2～3m東でも検出されるに及んだ。この結果、この瓦列が国分寺創建当時の東の築地に関するものであると推定されるにいたつた。そして、この東西に検出された瓦列の間が築地の基壇部分であると考えられその大きさは基底部幅約360cm、上部幅約300cmであった。この築地跡は調査に先だって測定した現国分寺の仁王門と本堂の建物の中心線にはほぼ平行している。しかし、この築地の建築様式などについては不明な点が多く、今後の調査に待たなければならないように思う。ただ、築地の基壇の中心付近に直径50cm前後のピット状落ちこみが3個確認され、築地の中心に柱をもちいていた可能性も考えられるが、南の方は上部が削平されたのか、それらしき痕跡は検出することが出来なかつた。



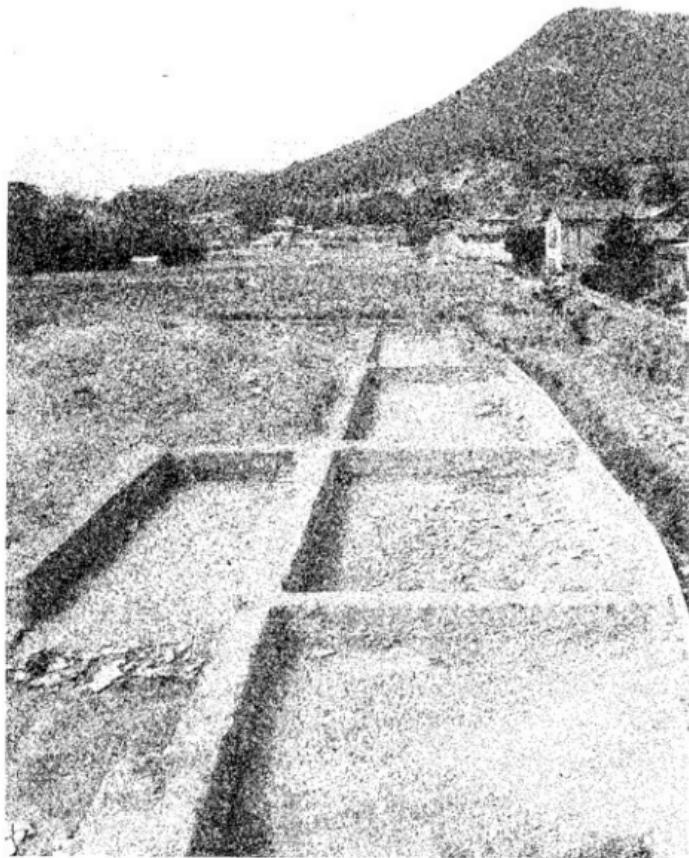
(東築地の瓦列)



(東築地瓦列実測図)

### (3) 北築地跡

南北に確認された築地跡は調査区の最北端で西に向っているのが認められた。これは北の築地跡と考えられ、その内側の肩の部分と推定される基壇状高まりが西へ約17m検出された。また、そこにはあわせてピット状落ちこみ（柱穴？）と考えられるものも3個見つかっているが、東の築地跡では築地の中心付近に、この北の築地跡ではその内側肩の部分で検出され状況が少し異なっている。ただし北の築地についてはその中心を確認するトレンチの設定が出来ない今まであり断定のことについては言及できない。



(北築地検出 調査区全景)

#### (4) 窯跡地に溝う溝（場）

元にも述べた讃岐國分寺創建当時のものと推定される窯の窯地にそって東側に上幅約2m、底幅約1m、深さ60cmの大きさの溝が検出された。ただこの溝の底部については推定寺域北境界線から南へ約30mのところで大きくその状態を異にしているのが明らかになった。北側部分はその最底部と考えられるところに小礫が多く混入しており地山の確認にとまどいを感じた。しかし、南側部分についてはその底部が粘土質層で固められているのが確認され、溝の残り具合が大変良い状態で検出された。

#### (5) その他

讃岐國分寺境界部分の東西、及び北をとり囲んでいる幅2～5mの畠地のうちの東の部分については、創建当時のものと推定される築地跡の確認によって、新たな位置づけが必要となった。

今回の調査の結果、それは、寺域南北233mのほぼ中間に設けた二ヶ所のトレンチから、幅約5mに及ぶ基壇状の高まりと推定される遺構が検出されたこと、あの遺物のところとも関連するが、遺物の包含状況などから後世寺域を拡張した際につくられた土墨跡ではないかと考えられる。ただ北側の境界については築地のまわりの部分がとりついており創建当時の築地跡がそのままの状態か少し手を加えて後世まで使用されたのではないかとも考えられる。

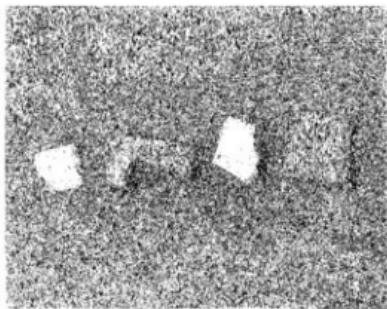
述べてきた遺構以外に、数個の埠を一列にならべたもの、ならびに黒く焼けた土層のひろがりが確認され工房跡等に關連する遺構ではないかとも考えられるが、調査区の拡張ができないままでありその性格を明らかにすることは出来なかった。さらに今回検出された東築地跡から寺域東の後世の土墨跡と考えられる幅10数メートルの間には耕作土の下に多量のこぶし大の礫がそうとうの厚さで敷きつめられていた。この礫層の性格についても解明は不充分かつ不明なままであるといわざるを得ない状態である。



(瓦の出土状況)



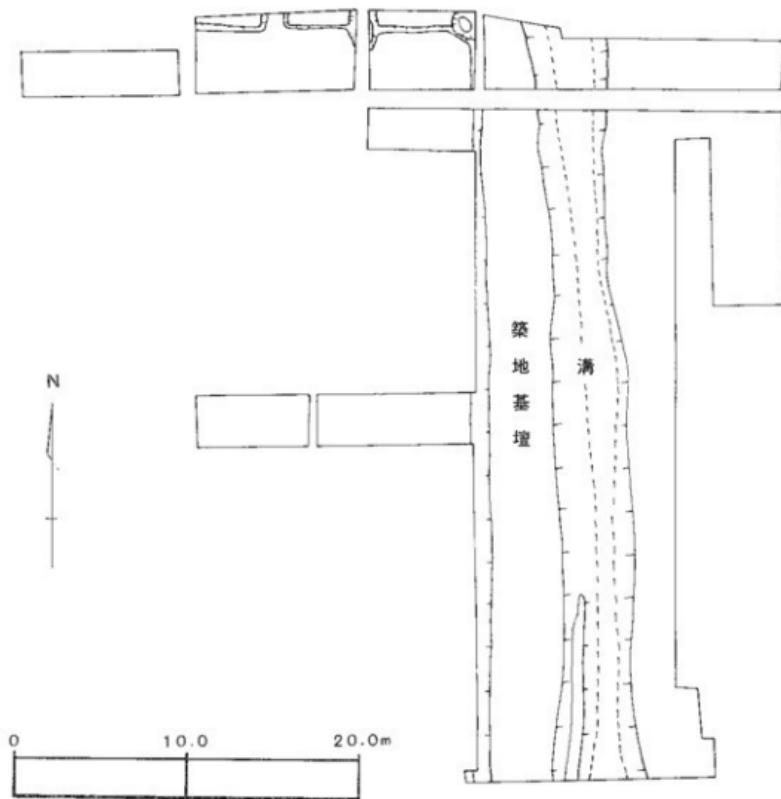
(溝の出土状況)



(埴 列)



(土器の出土状況)



(東築地ならびに溝の配置図)

## 6. 遺物について

### 1. はじめに

58年度調査区からは多量の瓦片ならびに甕、須恵器、土師器、黒色土器、白磁、鉄鉢などの遺物が検出された。特に瓦のうち一点「國分金光明□」とヘラ書きされた丸瓦の検出は注目にあたいするものである。

### 2. 瓦

検出された瓦は軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦ならびに鬼瓦の破片と考えられるものなどである。このうち今回の調査で検出された東の築地跡ならびに北の築地の肩と思われる遺構に関連するものとしては多量に出土した平瓦、丸瓦の類である。

平瓦は凸面には縦目文が残り、凹面は細かい布目の痕をヘラ状工具で調整しているものが多い。

丸瓦は多くは凸面を丁寧に擦消しているものがほとんどであり行基式より玉縁付丸瓦の方が多く出土している。この玉縁付丸瓦の中で最も注目すべき瓦は東築地の内側の瓦列から出土した文字瓦である。この瓦は左端に「國分金光明□」とヘラ書きされており、「國」と「金」の文字の左側が切れていることなどから瓦の製法を知る上でも重要な遺物と考えられる。

軒丸瓦は築地の基壇部付近で奈良～平安時代のものと考えられる六葉複弁蓮華文、八葉單弁、同複弁蓮華文瓦が4点出土している。このうち注目すべきものは築地瓦列に混じて出土した八葉複弁蓮華文瓦である。瓦当の径が23cmもあり過去讃岐國分寺跡からは出土例がみられないものである。しかし、築地付近では軒平瓦の出土が多く、これらの軒丸瓦が築地に使用されていたかどうかは判断としないままである。

また、指定寺域東限から西へ約13mの間に礫を多量に含んだ層が検出されている。この層からは鎌倉期のものと思われる三巴文軒丸瓦が出土している。さらにここでは径が9.5cmしかない非常に小型の八葉複弁蓮華文瓦も出土している。このように軒丸瓦は計9点出土している。

軒平瓦については、東築地にそった溝の東側ではほぼ完形な均正唐草文の文様をよく残しているものも含め破片が10数点出土している。

### 3. 塼

完形に近いくさび型塼が東築地の内側の溝のところで出土するとともに北築地の肩の部分にみられるピット近くから完型のもの、ピットの中から半分にわれたものが出土している。また、東築地からさらに西側に設定したトレンチから完全なものではないが塼列も検出されている。これらのものを含め合計で10数点の塼が出土しており時代的には奈良後期から平安初頭が考えられる。

#### 4. 土器

土器類では平安期のものと考えられる須恵器、土師器が量的に大変多いが瓦列の中から7世紀初頭頃のものと思われる軽身も出土している。

また寺域南北233mの中間付近に設定したトレンチで小礫群に混じって鎌倉～室町期頃のものではないかと考えられる土師質土器類が多量に出土した。さらに土器類ではその他に黒色土器、瓦質上器、白磁、青磁などが検出されている。

遺構との関連について土器類をみてみると、溝にかかるものは意外に少なく、底部から黒色土器、瓦質土器（和泉佐野産と考えられる）、土師器、須恵器が出土している。また遺構面を覆いつくしている淡灰色粘質土層（礫混入）からは、白磁、青磁、土師器、須恵器などが出土している。築地にかかるものとしては土師器、瓦質土器などが出土しているがその量はそんなに多くはない。

このように土器については奈良時代に先行するものから中世のものまでその年代は広範囲にわたっている。

#### 5. その他

その他の遺物としては鉄釘、鉄さい、銅さい、古いものでは石鎚などである。

## 一遺物

### 1. 八葉單弁蓮花文軒丸瓦

瓦当 - 径17.0cm 厚さ4.0cm

中区中房径4.5cm

蓮子1+6 灰色を呈し、胎土は砂粒  
を多く含む

A-3WE 築地北東隅基壇上出土

### 2. 八葉複弁蓮花文軒丸瓦

瓦当 - 径23cm 厚さ6.0cm

中区中房径7.8cm 蓮子1+8 暗灰色

C-3NS 築地内側瓦列中出土

### 3. 六葉複弁蓮花文軒丸瓦

瓦当 - 径15.0cm 厚さ4.5cm

中区中房径3.5cm

蓮子1+6 灰色

J-3NS 築地内側瓦列中出土

### 4. 八葉複弁蓮花文軒丸瓦

瓦当 - 径17.5cm 厚さ3.7cm

中区中房径5cm

蓮子1+6 灰色

J-3WE 築地内側瓦列中出土

### 5. 八葉單弁蓮花文軒丸瓦

瓦当 - 径21.0cm 厚さ4.5cm かなり破  
損している

中区中房径5cm

M-2WE より出土

### 6. 左巻き三巴文軒丸瓦

瓦当 - 径18.4cm 周縁の幅2.5cm

かなり破損している

E-2 第3層(疊混入)より出土

### 7. 八葉複弁蓮花文軒丸瓦

瓦当 - 径9.5cm 厚さ7.5cm

中区中房径2.0cm

蓮子1+8 暗灰色

E-2WE 淡白灰色粘土(疊混入)

より出土

### 8. 均正唐草文軒平瓦

瓦当厚さ6.0cm 上弦幅25.5cm

下弦幅26.3cm

弧深5.0cm

## 土器

灰褐色、胎土は粗い(砂粒を含む)

D-2 造痕直上より出土

### 9. 文字瓦(玉縁つき)「國分金光明口」

厚さ2cm 幅15.6cm

長さ27.2cm

玉縁部分は破損している

C-3NS 築地内側瓦列中出土

### 10. 平瓦

長さ33.5cm 厚さ2.0cm

上幅25.5cm

下幅23.0cm 淡白灰色

B-3NS 築地内側瓦列中出土

### 11. 塚

長さ40.0cm 幅25.5cm

明茶色、軟質

A-4WE 築地基壇のピット近くから  
出土

### 12. 塚

長さ38.0cm 上幅40.0cm

下幅25.5cm

厚さ14.0cm

明黄茶色

ほぼ中央に貫通する径1cmの穴がある  
E-3NS 築地内側瓦列中出土

## 土器

### 13. 須恵器

杯身 口径12cm 器高4cmを測る

受部が明瞭で、端部は丸味を帶  
びている

胎土精良で焼成も良好

底部はヘラ削りによってほぼ平  
坦な面をなす

ともにB-3NS 築地瓦列中  
より出土

### 14. 杯

口径14.0cm 器高3.2cmを測る

器壁は薄く焼成は堅緻である

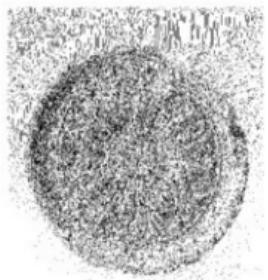
体部へ口縁部にかけて、直線的に外開  
青灰色を呈し、外面は灰緑色自然釉を

15. 高台付杯	口径18.2cm 器高6.3cmを測る 高台は外方へふんばらない低い高台を持つ 焼成良好で堅緻、青灰色を呈す J-3WE 第4層中出土	16. 皿	口径17.8cm 器高2.1cm 焼成は軟質で灰白色を呈し、一部黒化している
17. 皿	口径17.8cm 器高2.8cm 焼成は軟質で灰白色を呈している J-3WE 第4層中出土	18. 杯蓋	口径15.2cm 器高3.0cm つまみは頂部中央で僅かに高まる 端部は0.6cmを測り内傾するが、ゆるく外擣する J-3WE 第4層中出土
19. 杯蓋	口径15cm 器高2.7cm ボタン形状のつまみをもつ 天井部から緩く下がってやや内に折る J-3NS 築地内外瓦列中出土	20. 杯蓋	口径15.6cm 器高2.5cm つまみは頂部中央で僅かに高まる 天井部から口縁にかけて脇らみをもつて下がる 内面頂部を仕上げナデ、横ナデ調整をしている J-3NS 築地内側瓦列中出
21. 杯	口径14.4cm 器高3.5cm 体部内外面ともナデ調整	22. 杯	口径13.7cm 器高3.2cm 内外面ともナデ調整 外面部底部にタタキの痕跡が認められる 赤橙色を呈し、胎土精良で焼成も良好 A-2WE 淡灰白粘質土（礫混入）より出土
23. 杯	口径14.6cm 器高3.6cm 内外面ともナデ調整 かなり磨耗している 胎土は粗く微砂粒を多く含む 乳桿白色を呈す A-3NS 淡灰色粘質土（礫混入）より出土	24. 杯	口径14.6cm 器高3.6cm 内外面ともヘラ磨きの痕跡が認められる 淡橙色を呈し、焼成は普通である
25. 小皿	口径8.2cm 器高1.5cm 淡橙色を呈し、底部内面に指頭圧痕が認められる 胎土精良で焼成も良好	26. 小皿	口径8.2cm 器高1.8cm 乳灰白色を呈し、胎土は普通で微砂粒を含む ともにB-2NS 築地基壇上より出土
27. 黒色土器	口径14.5cm 器高5.0cm 高台径4.4cm 高台高0.5cm 内面のいぶし焼きをほどこしてある 内面は斜と平行のヘラ磨きが認められる 外面は粗雑な横なものちヘラ削り 高台は分厚で外方へふみ出す M-2 溝底より出土		

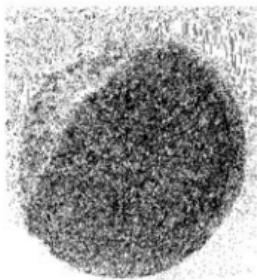
## 一土師器一

### 21. 杯

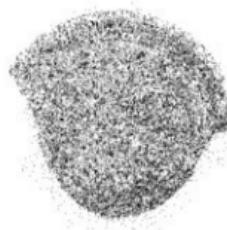
口径14.4cm 器高3.5cm  
体部内外面ともナデ調整



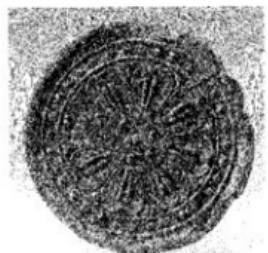
遺物 1



遺物 2



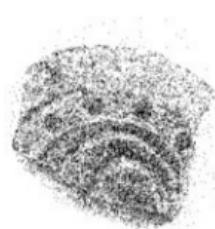
遺物 3



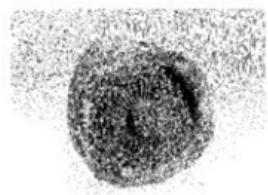
遺物 4



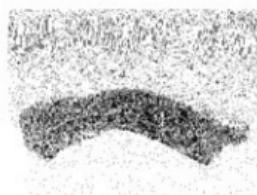
遺物 5



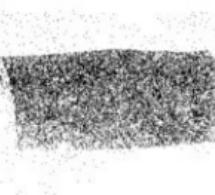
遺物 6



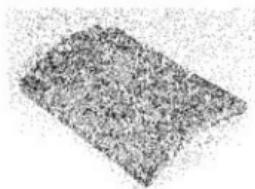
遺物 7



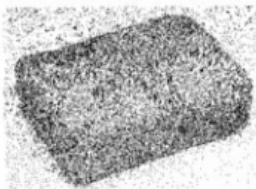
遺物 8



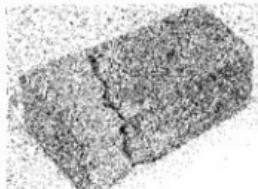
遺物 9



遺物 10



遺物 11



遺物 12



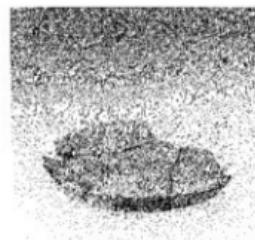
遺物 13



遺物 14



遺物 15



遺物 16



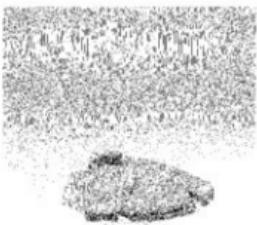
遺物 17



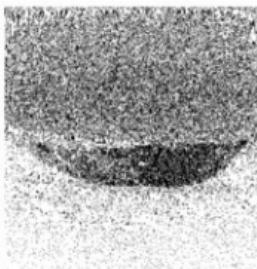
遺物 18



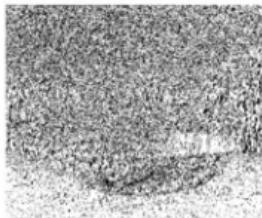
遺物 19



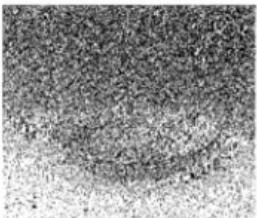
遺物 20



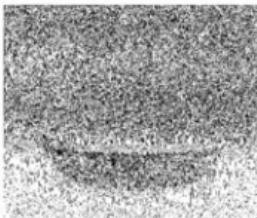
遺物 21



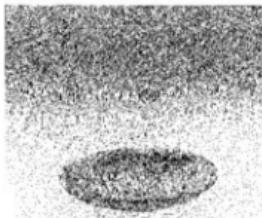
遺物 22



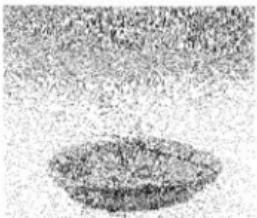
遺物 23



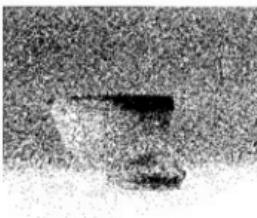
遺物 24



遺物 25

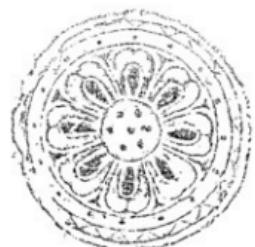


遺物 26

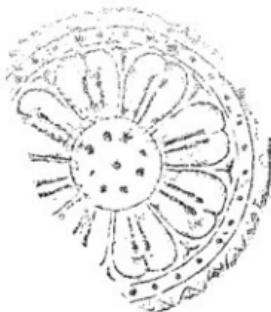


遺物 27

遺物拓本



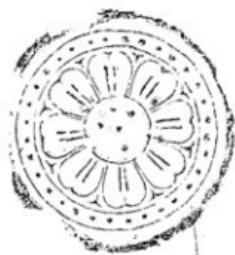
遺物 1



遺物 2



遺物 3



遺物 4



遺物 5



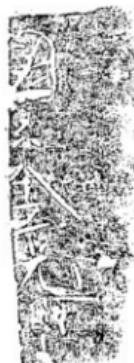
遺物 6



遺物 7



遺物 8



遺物 9

0 10 20

## ま と め

58年度調査においての最大の成果は讃岐国分寺の創建当時のものと推定される東築地跡の検出である。

これは、今回の調査が行なわれるまで指定寺域東端に幅3～5mで見られた地割りが国分寺創建時からの東域を画するものであると見られてきたことに対し再検討をせまるものである。つまり、讃岐国分寺の寺域についてはその東限が移動したことが明らかになったのである。創建当時の讃岐国分寺の東西幅は現在の指定寺域東西幅227mより9～13m西側にもうけられていたもようである。なお発掘前に設定した現国分寺の仁王門と講堂の中心線から今回検出され東築地にそった溝の東側までの距離が164mとなり約一町半である。

現指定寺域東端部については、耕作土の下に幅約5m、高さ約20cmの淡黄灰色粘質土基壇上の高まりが見られここからは瓦類は検出されず、拡張された国分寺の東限は今回検出された東築地とは多少おもむきを異にしているように考えられる。

しかし、寺域の北限については東築地跡のまわりが指定寺域の北端にとりつくとともに、北の築地のものと考えられる肩の部分も検出されており、指定寺域の地割りとほぼ一致している。このことから寺域の北限については創建当時のものが多少その形態を変えながらもほぼそのまま使用されていたように考えられる。

検出された東築地基壇部の両側からは瓦を中心に多量の遺物が出土した。瓦博類についてみると軒丸瓦など奈良時代後半のものが見られることから、築地は創建時のものと考えられる。この築地にそった溝底からは数点土器が出土したにとどまっている。これらの土器の編年観については県教委の渡部明夫氏や広瀬常雄氏の研究を参考に検討すると溝砂層中のものは11世紀に比定していいように思われる。

築地基壇の両側の遺物については古いものは7世紀初頭頃の杯身も混入していたが瓦質土器、土師器などは11～12世紀の時期のものと考えられる。11～12世紀と考えられる瓦質土器については同時期のものが築地東側の溝からも出土している。したがって溝についても築地にそいほぼ方向も同じことなどを含めて築地と同時代のものといつていいように思われる。

さて、これら築地や溝の下限についてみると、溝は出土遺物から平安末期頃まで存続していたものと考えられる。築地については時代を特定しうる遺物が少ないのでつきりとはしないがおそらく溝の下限期と同じころにその機能を停止したものと考えられる。検出された東築地から現在の指定寺域東限までの間については現本堂が鎌倉中期に建立されているのでこの時期に讃岐国分寺の寺域にも大きな変化があった可能性も考えられるのではないだろうか。

以上58年度発掘調査について概観してきたが来年度以降東築地にあったと考えられる東門跡さらには僧の生活に関連する雑舎なども明らかにされるものと思われる。これらの遺構の検出により奈良時代から現在まで現位置で存続してきたと考えられる讃岐国分寺の歴史的変遷が明らかになるものと期待される。

特別史跡 讲岐国分寺跡

昭和58年度調査

1984.3.31

編集 発行 国分寺町教育委員会

特別史跡讃岐国分寺跡平面図

縮尺  
1  
1000

